

文化

世界が認めた越後上布 『女達の戦い編』

南魚沼の春の訪れを告げる風物詩「越後上布」の雪さらし。
3月、雪さらし体験講座に女子プロメンバー8人が参加しました。

この催しは、南魚沼市教育委員会文化振興班が主催し、
塩沢織物協同組合・越後上布技術保存協会・南魚沼市観光協会の協力で行われたものです。

織物会館で午前中に居座機織り芋績み・拵くくりの説明を受けた後、
それぞれの工程を体験させていただきました。
ユネスコ無形文化遺産に登録された「世界に認められた伝統技術」に
ただただ感心をするばかり・・・

雪に閉ざされた生活の中で、生きるためといえども、
ただひたすら糸を紡ぎ織るといふ、気の遠くなるような仕事。
雪国の女性の根気力と実直さに何だか泣けてきました。



越後上布のふるさと、南魚沼の冬は長く、半年近くも雪の中。
田畑は一面真っ白な雪に覆われ、農業はできませんから、昔は雪が消える春まで、
男たちは一家の生活を支えるために、遠方に出稼ぎに行くのが当たり前だったとか・・・

家を空ける事ができない雪国の女性は、雪ごったくをしながら
家事をし、子どもを育て、生活を助けるために
骨の折れる細かい仕事の機織りをこなしていたというのか？スーパーウーマン……。 女子力。



この地域の女性たちは、幼いころから南魚沼の寒くて暗い雪の中での生活を、親からしつけられてきたので
辛い事には耐え忍ぶ根気が自然と身体に身についたのだろう。

よりあがりあさいと燃上り麻糸
こんなことを聞いたことがある。

昔、お嫁さんをもろう時には、
「姿かたち（スタイルやお顔）はどうでもいいと・・・
機織り上手な娘を嫁にもらうべし」

江戸時代になると機織りは地域の一大産業となります。
塩沢の文人「鈴木牧之」が書いた江戸時代の大ベストセラー
「北越雪譜」の中に、次の一文が残されている。

市にちぢみを持ちゆくは、兵士が戦場にむかふがごとし...
「命がけ」の心意気。

出来上がった一反の反物には、女性達の一念の想いが込められていた。

国の重要無形文化財に指定されている
「小千谷縮・越後上布」が平成 21 年 9 月 5 日、
ユネスコ無形文化遺産に登録された。

古来より変わることなく受け継がれている伝統技術が世界に認められた。
スゴイ・・・

「小千谷縮 越後上布」は苧麻（ちょま）という植物を原料とする麻織物。
麻を原料とする織物の歴史は古く、奈良の東大寺正倉院で越後古布が発見されており、
1200 年以上も前から越後で麻織物が織られていた事が判明している。
以来、「麻織物」の技術は、今日まで当地で途切れることなく

受け継がれ、守られてきた。

そして、おかげで伝統ある越後上布を現代も身に纏うことができる。

牧之翁が言うように、越後上布は、まさに

「雪の中から生まれ、雪国の人々と、その文化と共に育った織物」なんだ。

雪ありて縮あり

牧之翁の様にはいかないが、私たちはこの素晴らしい伝統織物を
これからもずっと、伝えてゆきたいと思うのです。

